Challenger チャレンジャー

# 小川和紗

視覚障害者柔道女子70kg級選手

## 小さな身体で大きな相手に挑んでいく私の柔道を見て「私にもできるかも」と思ってもらえたらうれしい。

おがわ・かずさ●1997（平成9）年2月生まれ、市原市出身。先天性の視神経膠腫のため、視力は現在両目とも0.01程度。中学1年で柔道を始めるが、高校2年のとき盲学校に転入し、柔道から離れる。しかし、教師から視覚障害者柔道を勧められて、高校卒業直後に練習再開。小柄ながら得意の背負い投げ、体落としを武器に、国内外の大会で好成績を収めている。東京2020パラリンピック柔道70kg級推薦候補内定。24年パラリンピックパリ大会も視野に活動中。尊敬する柔道家は大野将平選手と丸山城志郎選手。

### 中学生になって始めた柔道。最初の大会に優勝した喜びでドはまりしてしまいました。

生まれつき視覚障害があった私は、幼い頃は視力が0・05程度。それでも健常者の友達と一緒に遊び、学ぶ日々を過ごしていました。

小学生の頃は母が教科書を拡大コピーしてくれて、双眼鏡で黒板を見ながら授業を受けていました。運動が好きだったので、4年生になると陸上部に入部。走り幅跳びを始めました。でも、成績はイマイチ。というのも、踏切板がよく見えなくて、ファウルが多かったのです。

そんな私を見かねて、中学進学にあたって両親と友達のお父さんが柔道を勧めてくれました。視覚障害があってもできると勧めてくれたようです。

最初はピンとこなかった柔道。でも、夢中になるまで時間はかかりませんでした。というのも初めて出場した市原市の新人戦の大会で、いきなり優勝しちゃったのです。「やった！　私にもできるんだ！」。それからは見事にはまりました。

私が進んだ中学は柔道が強く、健常者の選手の中で結果を出すのは簡単ではありませんでした。例えば試合や練習の組み手争いで、相手の指がよく見えない。先輩た

ちがみんなに技のかけ方を見せてくれるときも、細かい部分がよく見えない。

でも強くなりたい一心で、練習では仲間に「遠慮しないで」と声をかけ、技がわからないときは先輩にお願いして実際に技をかけてもらうことで身につけました。

みんなより苦労したかもしれませんが、そうやって身につけた技が試合で決まると言葉にできない充足感を得られました。

## 盲学校で打ち込んだ生徒会活動。しかし柔道への思いは捨てがたく、視覚障害者柔道の道を歩み始める。

私の中学時代は柔道一色。高校に進学し、当然のように柔道部に入部しました。高校では、同級生たちがふだんからいろいろと手伝ってくれる。でも、だんだんと申し訳なさが強くなってきたのです。

それで、思い切って私は盲学校に転入しました。でも、そこに柔道部はありませんでした。その代わりとして打ち込んだのが生徒会。私は生徒会長に立候補し選挙で選ばれました。世の中の流行を発信したり、新たな行事を作ろうと学校側と交渉したりと積極的に活動しました。

充実した盲学校での2年間。しかし心の中には、柔道をしたいという思いがくすぶっていました。そして卒業直前、体育の先生に相談したところ、視覚障害者でもできる柔道があることを知ったのです。

「大好きな柔道が、またできる！」

私は卒業式翌日、いきなり練習に参加させてもらいました。そこは視覚障害者柔道の代表候補が集まるハイレベルな場所でしたが、柔道を始めた頃のように、私は瞬く間に引き込まれました。というのも、この柔道には、私が苦手だった組み手争いがなかったのです。試合は、組んだところから始まる。そうして、再び柔道にのめり込んでいきました。

乱取りで技をかける小川選手

## 得意の背負い投げ、体落としで大きな相手を倒して金メダルをつかみたい。

視覚障害者柔道では、釣手の感覚が重要です。相手の襟をつかむ釣手がセンサーとなって、相手の力量や体格、状態を推し量るわけです。例えば胸の圧が強ければ、相手が強気で勝ちに来ています。こうした鋭い感覚は、試合を重ねるにつれて研ぎ澄まされていきました。

思い出深い大会は2017年、ウズベキスタンで行われたワールドカップ。人生初の国際大会でなんと表彰台に上ることができたのです。

国際大会は信じられないほど熱気があり、初体験の私は心臓がバクバクするほど緊張しました。でも3位決定戦に勝って銅メダルを獲得すると、日本代表のメンバーだけではなく、世界中の選手たちが温かく祝福してくれました。ホテルに戻っても仲良くなった外国の選手がハイタッチやハグをしてくれて、とても幸せな気持ちになりました。

東京パラリンピックの70kg級推薦候補内定となった私は、大舞台に向けて思い描く夢があります。

この階級での私はとても小柄ですが、畳いっぱいに動いて大きな相手を崩し、得意技の背負い投げや体落としで相手を倒して金メダルを獲りたい。少し欲張りかもしれませんが、24年のパラリンピックパリ大会にも出て、年齢を重ねても世界の第一線で活躍できることを証明したいと思っています。

私はたまたま柔道と出合い、大好きな柔道に打ち込めています。でも世の中には、障害の有無にかかわらず、やりたいことに踏み出せない人もいると思う。私は大好きな柔道を通じて、そうした人に勇気を与える存在になりたい。「私にもできるかも」なんて思っていただけたらうれしい。そのためにも、相手がどんなに強くても臆さず立ち向かっていこうと思います。

練習の合間のわずかな休憩で、ほっと一息

撮影協力／順天堂大学柔道部